



胆石症と胆嚢炎、総胆管結石症について

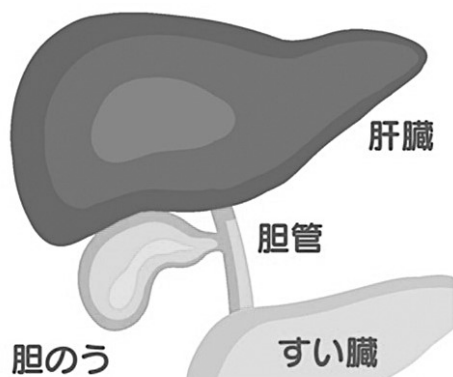
外科 浦部 和秀

「胆嚢」はお腹の右あばら辺り、肝臓の下に付着している袋状の臓器で、肝臓で作られた胆汁を一時的に貯めて、食事の際に「胆管」を通じて腸へ胆汁を流し、消化吸収の手助けをします。「胆石症」は胆嚢あるいは胆管に結石ができる病気です。日本の成人の10%が持っているといわれており、多くは胆嚢内（80%）で一部が胆管内（20%）といわれています。胆石症の2-3割は症状がなく無症状で経過しますが、半数の方に「胆道痛」という特有の痛みを生じます。胆嚢に胆石ができるのが「胆嚢結石症」です。40歳以降の女性に多いといわれており、食事の欧米化により高脂肪分の食事を摂取することや、肥満、ストレスなどが原因でできるといわれています。

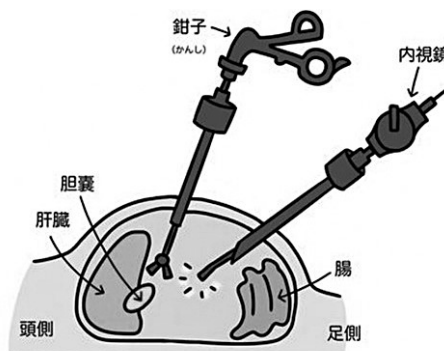
「胆嚢炎」とは主に胆石が胆嚢の出口に詰まって、胆汁が流れず、胆嚢の壁や胆嚢の中で細菌が悪さをして炎症を起こす病気です。原因として、胆石が一番多いですが、ご高齢者では胆嚢の血行が悪くなって起こる場合もあります。症状は、腹痛（みぞおちや右のあばら辺り）・発熱・黄疸などが代表的です。軽症の場合は、胆嚢が腫れる程度で済みますが重症の場合、胆嚢壊死や、腹膜炎を生じることがあります。治療は、入院の上で、軽症の場合は主に抗生剤治療、中等症より重度の場合は、胆嚢ドレナージ処置（胆嚢の中に溜まった胆汁をチューブで抜く）や、胆嚢摘出手術が必要になります。胆嚢摘出手術は、全身麻酔で開腹手術か腹腔鏡手術で行います。現在は主に腹腔鏡で手術を行います。「胆嚢を取っても大丈夫ですか?」という質問をよくされますが、残った肝臓や胆管が胆嚢の代わりの役割をするため大きな支障はありません。

総胆管結石の場合は、胆管に石が詰まり、眼や皮膚、尿が黄色く濃くなる「黄疸」症状や、腹痛や背部痛、菌が悪さをして炎症を起こす「胆管炎」で発熱することがあります。「胆管炎」はあっという間に重症になることがあり、早期の入院・抗生剤治療と同時に、石を取り除く処置が必要です。多くは内視鏡（胃カメラの特殊なもの）で十二指腸から結石を除去する処置を行います。総胆管結石の場合は無症状でも原則治療が必要です。

胆石をお持ちの患者さんが急な腹痛・発熱・黄疸などの症状を自覚した場合は、迷わず医療機関を受診されることをお勧めします。



肝臓で作られた胆汁は胆管を通じて一旦胆嚢で貯められ、食事によって収縮して、再度胆管に流れ、膵液と一緒に十二指腸に流れていきます。



腹腔鏡下胆嚢摘出術
特殊な器具でお腹に二酸化炭素を入れて膨らませ、特殊な鉗子を用いて胆嚢を切除します。

オンライン面会を行っています。

予約制となっておりますので御希望の方は

公立世羅中央病院 ☎0847-22-1127へお問合せください。

